

---

# 将軍と魔女

八郎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

将軍と魔女

### 【Nコード】

N8609V

### 【作者名】

八郎

### 【あらすじ】

宰相の末娘、ニコラに突然婚約者ができた。お相手は王弟アーダベルト将軍閣下。小さい頃から病弱で、家から殆ど出たことのないニコラは、極度の緊張と頭痛と吐き気に見舞われながら王宮へと向かう。これは泣く子も黙る将軍閣下と、ひとりぼっちの病弱魔女の、淡い恋の物語。

## その知らせは突然に

その知らせは今年最初の雪が降った翌日、とても寒い日にやってきた。

その日、ニコラは自室のベッドの中から静かに降り積もる雪を眺めていた。

あまり丈夫ではないこの体は小さい頃から咳・熱・腹痛のローテーションを繰り返し、無理をするとすぐニコラをベッドに縛りつける。昨日もつい調子がいいからと庭に出て初雪にはしゃいでしまったら、案の定夜中に熱を出してしまい、昼を過ぎた今でもベッドの上で過ごしている。

外の静けさとは裏腹に屋敷の中は何故か慌しく、その騒音で今しがた目が覚めたところだった。

「今日にはぎやかですね、お客様かしら」

部屋の隅でそっと控えていた侍女のアイラに問えば、彼女も首をかしげる。

「来客の予定はなかったはずですが？」

うーん、と眉間にしわを寄せて考えこむ彼女はそれでも美しい。

医術も心得ており、小さい頃からニコラの側にいてくれていた。母を早くに亡くしたニコラにとって、母親同然の自慢の侍女である彼女は、今年三十になるとは思えない美貌である。

ここは大陸の北に位置するウィスタリア国、その国の宰相であるジャン＝アルバードの屋敷。

ウィスタリアの宰相と聞けば、誰もがその秀才さと美しさを褒め称える。

柔和な顔立ちに似合わず切れ者。

賢王と慕われていた亡き先代の国王の頃から仕えており、今は幼くして王位に着いた現ウイスタリア国王を影に日向に支え、国内外の王侯貴族たちからも一目置かれている。

没落貴族から這い上がって今の地位を築いているというところは、国民から支持を集めている理由のひとつだ。もちろん美丈夫だといふところも大きい。

顔よし、頭よし、性格良し、そんな完璧宰相の家族もまた有名人だった。

宰相の妻レイラは、13年前病気で亡くなってしまったが、たいそう美人で宰相も溺愛していたらしい。

一番上の娘シルヴィアは、さながら完璧宰相女版。父親譲りの外見に社交性と華やかさが加わり、求婚者が後を絶たなかった。そんな彼女もつい先日隣国へと嫁いでしまい「これでウイスタリアの社交界もさみしくなるな」というのは、独身男性たちの間でため息と共に漏れ聞こえる声である。

宰相の一人息子であるレグルスは、若干十四歳ながらも将来を有望視されており、既に王宮に一室を賜り父の手伝いをしている。

そんな優秀な姉と弟に挟まれ、王宮から離れたこの屋敷でひっそりとして過ごしているのが、宰相の末娘であるニコラリアルバードである。

美しい金髪碧眼の両親から生まれたはずなのに、姉弟の中でただ一人、黒髪に紫の瞳。

「ニコラ様はお祖母様に似てらっしゃるのですよ、隔世遺伝と言うやつですわ」と、いつもアイラに慰めてもらっているが、白鳥の中に紛れ混んでしまった醜いアヒルの子のようで、そんな自分にいつも落胆している。

おまけに小さい頃から続く原因不明の体調不良は、どんな医者に見せても改善することはない……

そんな脆弱な体では、姉と共に華やかな社交界へ出ることも、弟のように父について政務の手伝いをすることも叶わず。

年頃の十七歳となった今では、有名人な家族とはすっかり縁遠くなり、社交界からも忘れ去られた深窓の令嬢となってしまうていた。

ただ、深窓の「令嬢」と言ってもお付きの侍女はアイラ一人。

私生活では質素儉約を努める父の方針で、屋敷の使用人が必要最低限だったためだ。

その数少ない使用人たちも、世話を焼くのは自然と華やかで将来有望なシルヴィアとレグルスばかりで、ニコラは使用人たちともあまり接点がなかった。

それでも何とかみんなと仲良くなるうと、体調のいい日には屋敷の掃除・洗濯・庭にある畑いじりまで試みしてみるのだが、結局その後体調を崩してしまい、屋敷のみんなの手を煩わせてしまう。

そんな自分が情けなくて仕方なかった。

宰相である父もその手伝いをしているレグルスも、仕事で殆どを王宮で過ごし、屋敷にはめったに帰ってこない。シルヴィアは結婚式の直前まで屋敷で過ごしていたが、昔から亡き母の変わりにアルバート家の女主人として忙しくしていたので、ニコラにかまっている暇はなかった。

ニコラ付きの侍女であるアイラも、一日中ニコラにばかりかまっていられない。

そのため、ニコラは小さい頃から一日の殆どを自室のベットの一人でぼつちで過ごしていた。

ここ数日のアルバート家は、華やかなシルヴィアが隣国の貴族へと嫁いでしまい、外の静寂と同じように静かな時間が流れていた。

それがどうだろう、今日はやけに騒がしい。

ニコラは原因を突き止めようとそっとベットから降りた。

その時・・・

「ニコラ姉様！！ 大変です！！」

とてつもない勢いでドアが開いたかと思うと、弟のレグルスが息を切らしながら部屋へと入ってきた。

普段はとても穏やかで、常にニコラにも礼節をもって接してくれる弟がめずらしい。

でも……ニコラはようやく納得がいった。

「レグルスが帰ってらしたのですね、今日は賑やかなはずだわ。お出迎えもせず申し訳ありませんでした」

「あ、ただいま帰りました……、いえ！！ そうではなくて、大変なのです」

ニコラは首をかしげて久々に会った弟を見つめる。シルヴィアの結婚式以来だ。

「いったいどうしたのですか？」

レグルスはまだ息が整わないらしく、肩を揺らしている。

そして、意を決したように大きく息を吸って一気にまくし立てた。

「ニコラ姉さまと、將軍閣下の婚約が決まりました」

「…………え？」

## 冬の始まり

レグルスは婚約が決まったことだけ告げると、また慌ただしく王宮へ戻っていった。

それと入れ替わりに王宮から正式文書が届き、書簡を持ってきた使者に言われるがまま、ニコラはその書類へサインをした。

そこには既に父と国王陛下、そしてお相手である將軍閣下のサインがあった。

\*\*\*\*\*

「ねえアイラ、私まだ信じられないの。だっていきなりすぎるでしょう?」

あの知らせがあつてから、今日で2週間。

訳が分からずパニック寸前だったニコラは、あの後すぐ熱を出して1週間も寝込んでしまった。知恵熱である。

その間にも着々と婚約の準備は進められ、あつという間に結婚式は4ヶ月後。準備のため、明日から王宮へ行くことが決まっていた。

屋敷から殆ど出たことがないニコラは、不安で押しつぶされそうになるのを必死でこらえて、この屋敷で過ごす最後の一日を噛み締めていた。

「確かに急でしたわね」

庭で取れたハーブでお茶を入れながら、アイラも首をかしげる。

「それに王宮でのマナーとか……本での知識は沢山あるのよ。でも実践したことがないんだもの、きつとアルバート家の名を汚してしまっわ」

ニコラは、自分が誰かへ嫁ぐなどできないと思っていた。

こんな病弱な体では、跡継ぎを生むことさえままならない。

姉のシルヴィアのように美しくければもう少し状況が違ったかも知れないが、黒い髪に不気味な紫色の瞳は、常に悪い顔色もあいまってさしずめ魔女のようだ。

こんな女はきつと妾にするのもお金の無駄といもの。

だから、ニコラは姉の結婚式が本当に羨ましかった。

姉のシルヴィアは隣国の貴族と結婚した。貴族には珍しい恋愛結婚だったらしい。

相手はアルバート家にとっても申し分なく、周りから祝福されて盛大に結婚式が執り行われた。

純白のドレスに身を包んだシルヴィアはいつも以上に輝いて見えて、沢山の人に囲まれて幸せそうに微笑むその姿は、ニコラの大好きな御伽噺に出てくるお姫様のようだった。

会場の隅でそつとその様子を見ていたニコラは、誰にも気づかれないうように静かにその場を辞した。

こんな不気味な妹がいると知れたら、相手への印象が悪くなるかもしれない。

後から姉には怒られたが、黙って親族がいなくなるのもそれはそれで礼儀知らずだと思われてしまったかもしれない、とその非礼を詫びると「違うわよ」と優しい手で頭をなでられた。

そんな姉のように、まさか自分が嫁ぐことになるなんて。

ニコラはこんな自分にも婚約者ができたことが嬉しくて、言われるがまま書類へサインしてしまったのを後悔していた。

もちろん、既に名だたる権力者たちのサインがある書類を前にして、ニコラに拒否権などなかったのだが……

突然決まった婚約者は、ウイスタリア国の将軍「アーダベルト」ウ



イスタリア』閣下。

国名である『ウイスタリア』の名を持つことを許された人物、現国王陛下の弟君。

成人の儀を終えてすぐ王位継承権を放棄して軍部へ降った。

二十五歳になる今は、兄である国王陛下の臣下として軍部をまとめる將軍閣下だ。

一睨みしただけで賊を壊滅させたとか、一度戦場へ出たら鬼神の如きご活用ぶりで、漆黒のその目が血の色に染まる、などという噂が流れているが、そんな恐ろしい噂がたっているにも関わらず軍部の部下たちからの支持は厚く、常に畏怖と羨望の的となっている。

背はウイスタリアの成人男性の平均より遙かに高く、野性的な、でもすつきりとした目鼻立ちで、その美しい顔に表情が現れたところを見た者はいないらしい。

この数日間で集めた情報では（おもにレグルスとアイラからの情報だが）そんな方が自分の結婚相手だなんて何かの間違いだとは思えない。

ニコラはまだ信じることなどできないでいた。

王位継承権を返上したとはいえ、王弟殿下である。しかも軍部の最高位である將軍アーダベルト閣下との婚約をこんなにも早急に、しかも相手が自分でいいのだろうか。

「お父様ですよね……」

ニコラはアイラに悟られないようにそつとため息をついた。

あの知らせがあつてからまだ父には会っていない。

父の王宮での地位は確固たるものだが、所詮は成り上がりの下級貴族にすぎない。

それをより確固たるものとするために、王族である閣下との婚約を取り付けたのだろうか。

「私でもお役に立てるかしら」

ニコラは降り積もる雪を眺めながら、我が家で飲める最後のハーブティーに口をつけた。

外はもうすっかり雪景色になっており、ウイスタリアの長い冬が始まるうとしていた。

## 緊張の初対面

まずい、非常にまずいです。

ニコラは心の中で嘆いていた。

場所はすでに王宮の一室。

もうすぐ婚約者である將軍閣下へ謁見しなければならぬ。

それなのに、頭痛と吐き気が一向に治まってくれそうにないのだ。

\*\*\*\*\*

今日から結婚式の準備のため、王宮で過ごすことになっている。

びくびくしながら王宮からの出迎えの馬車に乗ったまでは、まだ良かった。

外出すると大抵体調が悪くなるニコラだが、今日は極限にまで達した緊張も手伝っていつも以上に最悪だった。

王宮に到着する頃には顔面蒼白になっており、出迎えてくれた方々にきちんとお礼を述べられていたのか非常に怪しい。

通された客間で、とにかく落ち着こうと深呼吸してみたり、水を飲んですっきりしてみようとしたりけれど全く改善する気配がない。

その間にも、屋敷からただ一人付き添ってくれたアイラが、ときどきと最後の身支度を整えてくれている。血色の悪い顔に再度おしろいを施し、行きの馬車で少し乱れた髪を整えてくれた。

「おきれいですわ、ニコラ様」

そう言われて恐る恐る鏡に目をやると、いつもより幾分見れる顔がそこにはあつてほつとする。

「ありがとうございます。アイラのお化粧のおかげだわ」

しかし、よく見ると目の下の隈や化粧の下の悪すぎる顔色が浮き出

てきそうので、すぐに鏡からは目をそらしてしまった。

これ以上見ていたらもっと自信を失ってしまう。

ニコラは知らず知らず、ドレスを強く握り締めていた。

その時、客間の扉が静かに叩かれた。

「ニコラ＝アルバート様、お待ちせ致しました。ご案内致します」

入ってきたのはニコラと同年代のまだあどけない少年。

王宮で働くには顔も良くなくてはいけないのだろうか、という疑問が湧いてくるほど綺麗な美少年だ。

ニコラはドレスを握り締めたまま、アイラとともにその少年の後に続いた。

緊張は最高潮に達しており、頭痛と吐き気は強まる一方だ。

そして案内されたのは細部にまで細工が施された重厚な扉の前。

少年が「お連れしました」とノックをしてなかに問えば、「どうぞと優しい声が返ってくる。

これが將軍閣下の声？

少年はゆっくりと扉を開き無言で入室を促す。

ニコラはドレスの皺を慌てて伸ばして、ゆっくりと部屋の中へと足を進めた。

怖くてまだ正面を見ることができないが、部屋の奥に人の気配を感じて深々と礼をとる。

「お初にお目にかかります。ニコラ＝アルバートでございます」

「やあニコラ殿。ジャン宰相からよく話は聞いているよ、可愛い方だね」

「え?!」

思いがけない言葉に、ニコラは思わず顔を上げてしまった。

目の前……と言っても、緊張のあまり部屋に入っただけのところであいまいしてしまっただけ、その人物との距離はまだだいぶある。

遠くからでも分かるその優しい面差しは、ニコラにも覚えがあった。

「弟はまだ仕事中だね。もうすぐ来るはずだからお茶でもして待ってようか」

目の前の人物はウイスタリア国の国王陛下だ。

国民への露出も多く、ニコラも王族関係の本でその顔は知っていた。もちろん実際に会うのは初めてだ。しかもこんな至近距離で。

一気に緊張が高まって今度は胃のあたりが痛い。

ニコラはそれにもなんとか耐えて、入り口付近で踏ん張っていた。

その時、

「遅れた。申し訳ない」

その声は突然ニコラの真後ろから聞こえてきた。

重低音の低い声はそれだけで耳をしばれさせる。

陛下はため息混じりに、視線をニコラから後ろへ移す。

「おいおい、婚約者殿との初対面がその格好ではあんまりではないか？」

「？」

その視線につられてニコラもゆっくり後ろを振り向く。

そこには……

血だらけの軍服を身にまとった漆黒の瞳の男が一人。

その瞳と目が合うと、ニコラは静かにその場に倒れ、意識を手放した。

## 目覚めたら

「……………」

ニコラは見知らぬベッドの上で目を覚ました。いつもの気だるさはなく、幾分気分がいい。

上半身だけ起き上がって辺りを見回すと、上品で可愛い家具と調度品が目に入る。

一目で女性の部屋だと分かるそこには小さな暖炉があり、既に薪がくべられ部屋を温かく包みこんでいた。

ベッドはいつもの自分のそれよりだいぶ広く、ふわふわと心地よい。「気持ちいい……」

ニコラはせっかく起き上がった体を再びベッドに沈めた。

あまりの心地よさにまた眠りそうになって、そこでようやく疑問が沸く。

「……………」

一生懸命自分の記憶をたどって、ニコラはようやく先程の失態を思い出して青ざめた。

血だらけの軍服を着ていつのまにか後ろに立っていた男性。

あれはどう考えても、婚約者である將軍アーダベルト閣下で……ニコラは彼の目の前で意識を失ってしまったのだ。不敬罪で打ち首も

のである。

不安と緊張がだいぶ勝っていたが、それでもニコラはこの日を楽しみにしていた。

こんな自分を嫁にしてもいいと言ってくれた人に会える。

これでやっと自分も父やアルバート家の役に立てる。

だからこの2週間、ニコラはそれこそ心血を注いで会食でのマナーや謁見での挨拶の練習をひたすらしていた。今までベッドの上で本ばかり読んでいたニコラには、知識はあっても実践経験がない。実際に体を動かして一つ一つの動作の練習していくのはかなり辛く体力を消耗した。

それでも頑張ってきたのは全てこの日のため。

せっかく与えられた機会を大事にしたかった。がっかりされたくないかったのに……練習の成果を全く発揮することなく撃沈してしまった。あんな失態をしてしまったのは婚約破棄されてもおかしくない。初対面で気絶してしまうなんて、相手への印象は最悪のはずだ。

ニコラはまたゆっくりと起き上がった。

今度はしっかりと体を起こして、この大きな、自分には不釣り合いなベッドから抜け出す。

広い部屋に人の気配はなく、しんと静まり返っていた。

アイラはどこに行ってしまったのだろうか。

「まさか。私のせいでアイラがお叱りを……」

「いや、部屋の外で待たせている」

「……」

独り言だったはずのそれに返事が返ってきて、ニコラは体を強張らせた。

声はちょうどベッドから死角になっている窓辺から聞こえ、恐る恐るそちらへ視線をやると黒い人影が見える。

外はいつの間にか薄暗くなっていたようで、窓辺に腰掛けているように見えるその人物をはつきりと見ることはできない。

「あの……どちら様でしょうか？」

「……」

黒い影から返事はない。



「あー!!」

そこでニコラは慌てて身なりを整えた。

ここはあきらかに自分の部屋ではない。まずは自分が名乗らなければと思い直して、深々と礼をとる。

「失礼しました、私ニコラ＝アルバートと申します」

これでよし。

ニコラは満足して、もう一度ゆっくりと声の主へ視線を向けた。

「知っている。俺はアーダベルト＝ウイスタリアだ」

「……アーダ、ベルト、ウイス……タリア？」

え、將軍閣下?!

よく聞けば、ニコラが気を失う寸前に聞いたあの声だ。

呆然として立ち尽くすニコラに、アーダベルトはゆっくりと近づいてくる。

暖炉の火に照らされてようやくはつきりと見えてきたそれは、間違いなく先ほど一瞬目が合った漆黒の瞳だった。

どうでしょう!!

ニコラは、急に自分の心臓が早くなったのが分かった。

若い男性と密室で二人きり。

服の上からでも分かる筋肉質な体は大きく、身長は見上げる程高い。そのすべてが今までのニコラには無縁なもので……

思わず後ずさってしまったら、アーダベルトはそこで動きを止めた。服は先ほどの血だらけの軍服ではなく、綺麗な王族の衣装だ。

「気分は、もういいのか？」

「……はい」

「そうか……俺は2・3日王宮を空ける。何かあったらアイラがフランスに聞け」  
それだけ言うと、アーダベルトはすばやくニコラに背を向け、足早に部屋を出て行ってしまった。

邂逅は5分もなかった。

一人取り残されたニコラは驚きと緊張の余韻でまだ呆然としている。一体いつからあそこにいたのだろうか。

全く気配を感じなかったのは、彼が軍人だからか単に自分が鈍かったのか。  
外の暗さを見れば自分がどれ程眠っていたのか嫌でも思い知らされる。

せつかくアイラに整えてもらった髪は鏡を見ずとも乱れているのが分かったし、社交界で飛び交うようなセンスのいい会話は全くできなかった。

「はあ」

ニコラは本日二度目の失敗に落胆した。  
きつと今頃こんな女を婚約者にしてしまったことを後悔しているだろう。

でも、もう少しお話したかったな。

そんなおこがましいことをつい思っついまうぐらい、アーダベルト將軍はニコラにとって魅力的だった。

じっくりと見た（といっても数分だが）彼は「王弟殿下」より「將軍閣下」という言葉がしっくりとくる。絵本の挿絵で見るような王子様とはだいぶ違う。どらかと言えば敵の魔王だったり、海賊だったり……それに近い。表情は皆無で一見すると冷淡だったが、漆黒の瞳はとても暖かく印象的だった。

散々失態をしてしまったニコラにも怒ることなく、むしろ体調を気にかけてくれた。  
物語に出てくる魔王も海賊も、一見すると恐ろしいが根は優しくったりするのだ。

ニコラはぎゅっと胸の辺りをおさえた。心臓の鼓動は相変わらず早い。

いつのまにか今朝から続いていた頭痛と吐き気は消えていた。  
その代わり……体中が熱を持ったようにあつかった。

## 【臆病な婚約者】

アーダベルトは急いで部屋を出た。  
が、後ろ髪を引かれるような思いにゆっくりと後ろを振り返る。  
自分で閉めたはずの扉は固く閉ざされ、婚約者からの拒絶のように見えた。

「閣下、ニコラ様とはゆっくりお話できましたか？」

扉の前でじつとしていたアーダベルトに、部屋の外で控えていたアイラが妖艶な笑みを浮かべながら近づいてくる。アーダベルトは、彼女にそこで待つよう指示していた数時間前の自分を思い出して激しく後悔した。

アーダベルトは昔から彼女のことをよく知っている。  
常に美しく微笑んでいる彼女の世界がニコラを中心に回っており、それ以外には全く興味を示さないことも。  
美しいと言われる容姿に似合わずその性格は実に腹黒く、何より自分を毛嫌いしていることも。

「いや……」

「まあ、あんなに長時間部屋の中に居座っておいて、何もお伝えしてませんの？」

言葉使いは至って丁寧だが、所々毒々しい。

「……」

何も言わないアーダベルトを一瞥して、アイラは微笑むのを止めた。  
「役立たずとはこの事ですね。そもそも婚約者との初対面で血だらけの軍服を着てくる殿方がどこにいますか？」

「……」

アーダベルトはそれにも無言を貫き通していた。黙っていると睨んでいるように見えるその表情は、一層恐ろしさを増している。

それに慣れているはずのアイラでも思わず一步下がってしまったが、負けじとキツと睨み返してきた。

「もういいですわ。王宮を空けると聞きましたけど？」

「ああ、西に不穏な動きがあるので行ってくる」

「せっかく王宮にいらしたニコラ様をおいて？ まあいいですけど、気絶するぐらい閣下が恐ろしかったですわ。お可哀想に……例のことがなければ私は断固として反対しておりまして。ニコラ様にはもつと他にお似合いの方がいたはずですよ」

「そうだな……」

それだけ言うと、アーダベルトは今度こそその場を足早に離れた。遠くでまだアイラが甲高い声で何か言っているが聞こえないふりをする。

実際時間が押していたので、アイラと立ち話をしている暇などなかったのだ。

それでも足を止めてしまったのは、あの場を離れ難かったからだろう。

さすがにあの格好のまま行くのはまずかったか。

アーダベルトは軍部へと向かいながら、先ほどの出来事を思い出して一人落胆していた。

もちろん、完璧なまでのポーカーフェイスで、彼が落ち込んでいるなどと思う者は一人もない。

すれ違う騎士や侍女たちは、いつも通り深々と礼をとっていた。

\*\*\*\*\*

数時間前。

謁見の直前まで仕事をしていたアーダベルトは、婚約者の登城に乗じて王宮に侵入してこうとした賊を討ち取っていた。賊は特別な相手で、将軍であるアーダベルトも自ら赴かねばならなかったのだ。その後、着替える時間も惜しかったので、そのまま婚約者の元へと向かったのだが……

「遅れた。申し訳ない」

アーダベルトと目が合った瞬間、婚約者のニコラ＝アルバートは気を失って倒れてしまった。

自分の外見が恐ろしいのは知っていたし、それを別に何とも思ったことはなかった。

軍で将軍職を預かるようになってからは、むしろ役立っている。

しかし、今回ばかりは自分の容姿を呪った。

血まみれの服に驚いたのもあるだろうが、それを着ていたのが兄である国王だったらまた反応が違っただろう。

優しく女性受けのいい兄と違い、無駄に大きい身長と常に表情がない自分の顔は女性が好むそれではないことを、アーダベルトも周りの人間も周知していた。

アーダベルトは、部下の一人が倒れたニコラを抱き起こそうとするのを強引に奪った。

その行動は、まるで血まみれの魔王が生贄の少女を奪っていったような光景で、その場にいた全員が恐怖でしばらく動けずにいた。

そんな周りに気付く余裕のなかったアーダベルトは、そのままニコラを抱きかかえて彼女のために用意していた部屋へと運んだ。

抱きかかえたニコラは羽が生えているのではと思うほど軽く、ベットへ横たえたその肢体は透き通るように白かった。

アーダベルトはそんな彼女の紫の……アメジストのような瞳をもう一度見たくて、部屋で付き添うことにした。

片付けなければならぬ仕事は山程あったが、すべてニコラの眠る

部屋へと運ばせ、眠りの邪魔にならないように静かに片付けた。もちろん服を着替えて。

結婚前の男女が密室で二人きりになることを断固として反対していたアイラは部屋から閉め出されたが、アーダベルトがニコラの側にいることがニコラにとって一番いいこともよく知っていたので、扉のすぐ側で待機することやっとな出て行ったのだ。

そうまでして二人きりになり、ゆっくり話そうと思っていたのに、いざニコラが目を覚ましてその瞳と目が会つと、アーダベルトはどうしたらいいのか分からなくなってしまった。

また気を失ってしまうかもしれないという危惧は、何とか大丈夫だったが、その瞳は恐怖で揺らいでいるように見えた。

近づこうとすると一歩下がられてしまい、ニコラの体が硬直したのが分かった。

顔色は幾分よくなっているようだったので、アーダベルトはこれ以上嫌われるのを恐れて、急いで部屋を出たのだった。

## ニコラの真実

固く閉ざされた扉を見つめながら、ニコラはただ立ち尽くしていた。

「ニコラ様、失礼します」

ノックの音でふと我に返ったニコラは、その声に返事を返して扉を開ける。

そこには心配そうな顔をしたアイラがいて、ニコラは安心したのと申し訳ないので泣きそうになった。

「アイラ！！ ごめんなさい。また迷惑をかけてしまって……」

「そんなことないですわ。それより大丈夫でしたか？」

「ええ、もう大丈夫です。沢山寝たからすっきりしました。昨日は緊張してあまり眠れなくて……だからあんなことに……本当にごめんなさい」

するとアイラは驚いたように目を見開いた。

「ニコラ様は眠気と緊張で倒れたんですの？ 私てつきり……閣下の格好を見て気絶されたのかと思っておりました。あの血だらけの服はないですわ……！」

アイラが珍しく声を荒げていたが、その言葉にニコラは首を振る。

「陛下が“閣下はお仕事だ”っておっしゃってたじゃない。お忙しいなか来て頂いただけでも感謝しないと罰が当たります。それなのに倒れてしまって、本当に情けないですけど」

落ち込むニコラを見て、アイラは呆れたように肩を落とした。

「ニコラ様はお優し過ぎますわ」

先程のアーダベルトの格好は誰が見ても令嬢の前に出てくる格好ではない。

普通ならその失礼な態度に怒ってもいい所なのだが、良くも悪くも世間知らずなニコラには、一般的にそれが相手を軽んじている行為だということが分からなかった。もちろん、アーダベルトの心中は誰にも分からないが……



それより、とニコラは目を輝かせた。

「閣下の方がお優しいわ。先ほどまでいらっしやたのよ。すぐ出て行かれたけど」

最後の方は自分で言いながら表情がどんどん曇っていくのが分かったが、不器用なニコラにポーカーフェイスなどと言う高等なことはできない。

アーダベルトがすぐ出て行ってしまったのは自分に興味がないからだろう、とまたもや落ち込むニコラを見て、今度はアイラは首をかしげた。

「閣下を優しいだなんていう方を始めて見ましたわ」

「え？」

「いえ……何でもありません」

アイラはいつものように美しく微笑みながら、何か軽く食事をしましょうか、と話題を変えた。

そう言えば昼前の謁見から何も食べていない。

本当はあの謁見の後昼食会をすることになっており、今の時間も本当ならアーダベルトと二人で夕食をとっているはずだった。ニコラが倒れたことで、すべて中止になってしまったらしい。

きつと沢山の人が、色々と準備をしていてくれたに違いない。もちろん自分のためではなく將軍閣下のために。

自分のせいでの全てをダメにしてしまったかと思うと、ニコラは悲しくなってきた深い溜息がでた。

「はあ」

「溜息ばかりついてると幸せが逃げちゃうよ、魔女殿」

「きゃあー!!」

いきなり後ろから聞こえてきた少年の声に、ニコラは思わず叫んでしまった。

食事の準備をしようとしてくれていたアイラも、久々に聞くニコラの大きな声と、突然現れた少年に驚いたようで足をとめる。

「フランツ！！ あなたまで無断で女性の部屋に入ってきたのですか。この王宮には礼儀知らずしかいませんのね！！」

いつも穏やかなアイラが今日はやけに声を荒げているのに驚きながら、ニコラはゆっくりと振り返った。

「あ、あなたさっきの……」

そこにいたのは先ほど案内をしてくれたあの美少年だ。

サラサラと揺れる金髪から碧い瞳が覗いている。

「申し遅れました魔女殿。僕はフランツ＝バトラーです、以後お見知り置きを」

スマートに礼をとったフランツは、もういいよね、と言いながら襟元を緩めた。

そのあまりにも砕けた態度に、ニコラの緊張もあまりない。

「えっと、ニコラ＝アルバートです。あの、魔女殿って……？」

「貴方意外に誰がいるの？」

「そう、……すよね……」

自分でもこの黒髪と不気味な瞳は、物語に出てくる悪い魔女のようだと思ったことは何度もあるが、さすがに人から直接言われるとシヨックが大きい。

「ちよっとフランツ！！ まだ閣下は何もお話されてないのよ」

アイラが間に入ってニコラを背でかばってくれた。

それにフランツは不機嫌そうに顔をしかめるが、アイラの言葉を反芻して次第にその大きな眼をより見開いていく。

「え？ アーダベルト様、何も言っていないの？ ずっとこの部屋で一緒にいたじゃん」

アイラの肩越しに問われたニコラは一人混乱していた。

「私は、さっき目を覚まして……閣下はすぐに出て行かれました」それがニコラが見た真実である。

いつからいたかは分からないが、話したのは5分もない。

体面を気にして仕方なくアーダベルトが見舞いに来てくれた時に、自分が都合よく目を覚ましてしまったのだと思っていたが違うのだろうか。

いったい何がどうなっているのか分からずにいると、アイラが呆れたように溜息をついた。

すかさずフランツが「幸せが逃げるよ」と小突いていたが、アイラは全く気にしていない。

「フランツが無礼をして申し訳ありません。ニコラ様、閣下とは少しはお話されましたか？」

ニコラは先ほどの会話を思い出した。

特に色っぽい話をした訳ではないのに、なぜか思い出しただけで体温が上昇する。

「えっと、“体調は大丈夫か”と聞かれて……」

「それから？」

「あとは……“王宮を2・3日空けるので、何かあったらアイラがフランツに聞け”と」

「他には？」

「……それだけです」

「そうですか、やはり閣下は何もお伝えしてませんのね」

そう言っただけで考え込むアイラを他所に、フランツが「フランツって僕のことね、何でも聞いて」とおどけてみせた。ニコラがそれにくすぐすと笑っていると、真剣な顔をしたアイラがニコラに向かって話し始める。

「ニコラ様よく聞いてくださいな。私からお話しているのか分からないのですが……」

「いいんじゃない、アーダベルト様が僕たちに聞けって言ったんだろ？」

「おだまり」

フランツをキッと睨んだアイラは、またニコラに向き直って話を進める。

「いいですか、落ち着いて聞いてくださいな」  
「はい」

「実は、ニコラ様は……魔女なのです」

「はい？」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8609v/>

---

将軍と魔女

2011年9月29日17時04分発行